

# 連携実務者とケアマネジャーが 共に課題を解決する場づくり



● 山形県 鶴岡市 ●



三原一郎 鶴岡地区医師会 会長

みはら いちろう●1976年東京慈恵会医科大学卒業。同大学病院皮膚科勤務を経て、1993年郷里の山形県鶴岡市に三原皮膚科を開業。1996年鶴岡地区医師会情報システム委員長に就任、同医師会内にイントラネットを構築し情報化を推進する。2002年山形県医師会常任理事。2006年鶴岡地区医師会副会長。2008年日本医師会医療IT委員会委員。2012年より鶴岡地区医師会会長。



鶴岡市健康福祉部長寿介護課  
地域包括支援センター 主査  
叶野真弓 主任介護支援専門員

かのう まゆみ●旧藤島町に保健師として入職。1999年より介護保険担当となり、介護保険認定審査会事務局、介護支援専門員支援、地域ケア会議などを担当。2005年合併により鶴岡市になり、2006年より地域包括支援センターに異動。2008年より主任介護支援専門員として、包括的・継続的ケアマネジメントを担当。主任介護支援専門員の研修など、育成支援にも取り組んでいる。



鶴岡協立病院 地域医療連携室  
瀬尾利加子 主任

せお りか●鶴岡協立病院地域医療連携室勤務。入職後すぐ連携室勤務になった「生粋」の連携室担当者。庄内地域医療連携の会世話人・事務局長を務める。全国初の連携室担当者同士のメーリングリスト『地域連携室スタッフの給湯室』を立ち上げ、自身が苦労し、手探りで続けてきた取り組みを基に、全国の悩める連携室担当者と共に、問題解決のための情報を提供し合っている。

## 庄内南部地域における医療と 介護の連携を取り巻く環境

庄内南部地域（当地区）は、鶴岡市と三川町の1市1町で構成され、人口は鶴岡市が13万6,146人、三川町が7,651人である。鶴岡市は東北一の広い面積を持ち合わせた市ではあるが、市の中心部から人口の減少があり、いわゆる「ドーナツ化現象」が著しく表れている。

また、高齢化率は鶴岡地域全体で28.4%であり、対65歳人口割合から見た、寝たきり高齢者率は鶴岡市が4.3%で県内一高い割合となっている。そのせいか、介護保険の要介護認定率も19.7%と県内一高い。圏域別でも庄内地域全体で19.3%と高く、着実に高齢化が進んでいる。

当地区では、鶴岡地区医師会が主導する形で、地域電子カルテNet4Uの導入、国の緩和ケア普及のための地域プロジェクトへの参画、IT化した地域連携パスの運用、在宅医

療連携拠点事業「ほたる」の設置など、多職種連携を基盤とした地域医療の質向上のための活動を数多く行ってきた。

また、一方で病院の連携実務者、鶴岡市介護保険事業者連絡協議会、地域包括支援センターらが相互に協力し、それぞれに医療と介護の課題を解決すべく、工夫をこらしながらさまざまな取り組みを行っている。本稿では、それらの活動について述べる。

## 医療と介護の連携の場づくり

### ○ 病院・施設の連携実務者を 主体とした活動

#### 庄内地域医療連携の会

庄内地域医療連携の会（連携の会）は、病院や施設の連携実務者の「何をしたらいいかわからない」「ほかの病院の業務を知りたい」「担当者を知りたい」という切実な要望から設立された。2006年4月に第1回庄内地域の医療連携についての学習会を開催した。

**表 1** 連携の会の開催テーマ

2006年4月	設立説明, 各病院の連携部門紹介
7月	病院連携窓口情報の冊子, 実際の事例と問題点
10月	山形市立病院済生館における地域医療連携の取り組みについて
12月	病院と介護老人保健施設との連携について
2007年4月	今, 庄内の地域医療連携に何が必要か
6月	連携業務と情報の統一化
9月	医療制度の改革と保健医療計画について
11月	病院と介護保健施設との連携を考える
同日開催	第2回全国連携室ネットワーク連絡会in鶴岡 現地事務局を担当
2008年4月	日本海総合病院および酒田医療センターの紹介
6月	退院支援と退院調整を考えよう
9月	第1回山形県さくらんぼネットワーク(山形県地域医療連携協議会) 「テーマ: 地域医療連携ネットワークのあり方」を当会が主催
11月	老人保健施設と病院の連携について
2009年4月	南庄内および北庄内の地域医療連携の現状
6月	病院・福祉・施設を知ろう パネルディスカッション
9月	在宅支援について一緒に考えよう
2010年5月	病院の機能情報を共有しよう~病院窓口情報冊子を元に~
7月	第3回 山形県さくらんぼネットワーク(山形県地域医療連携協議会) 「テーマ: 連携に関わる診療報酬改定と実際の連携室業務」を当会が主催
2011年4月	これからの庄内地区の多職種連携に必要なこと
7月	高齢者の脱水と水分補給(鶴岡会場, 酒田会場2回開催)
10月	健やかに安心して暮らせる地域をつくろう(ワールド・カフェ形式)
2012年3月	平成24年度診療報酬・介護報酬W改定の傾向と対策~地域連携の分野を中心に~

設立から現在まで、年に4回程度開催しているが、開催テーマは関係者の要望や地域の状況に合わせて決めている(表1)。連携の会では、参加者が相互に理解し合い、日常的につながりを持てる関係を目指し、「座学」ではなく「語り合う」ことを主体としたグループワークを多く行っている。

2011年10月には、「ワールド・カフェ(もどき)」形式で会を開催した。誰も本物のワールド・カフェを体験したことがなかったので、参考書片手に準備を進めた。会場をハロウィン風にディスプレイし、世話人は大きな蝶ネクタイを付けて対応した。なじみのない手法であったが、参加した方々には大好評で次回開催を望まれている。こういった参加型の企画は、皆がテーマを共有し、忌憚のない意見を出し合うことで、相互理解を深めることにつながっており、非常に有用だと感じている。

参加職種は、連携担当者はもちろんのこと、医師、看護師、医療ソーシャルワーカー、精神保健福祉士、ケアマネジャー、歯科医師、歯科衛生士、理学療法士、保健師、社会福祉士、介護支援専門員、介護福祉士、介護員などさまざまである。「この会に参加することで、さまざまな職種の人やスーパーアドバイザーと出会い、多くのことを学び、その後の取り組みに生かすことができた」との声もいただいている。

### 連携に役立つ情報の収集と冊子化

連携の会では、前述した会の開催だけではなく、病院の基本情報、入院・外来の医療相談の担当者と連絡先を記載した「病院連携窓口情報」、施設の「医療依存度の高い方の受け入れ情報」の冊子化、また、病院から病院への転院相談を行うための「転院相談シート」を作成し、事務の効率化を目指した活動も



写真

医療と介護の  
連携研修会

病院関係者と介護支援専門員との連携検討会  
～医療と介護の連携のために～



行っている。

なお、庄内地域医療連携の会の活動は、2012年に第1回杉浦地域医療振興賞を受賞した。

## ○ 鶴岡市の医療と介護の

### 連携推進企画会議を主体とした活動

#### 医療と介護の連携研修会

鶴岡市では、居宅支援事業所部会のメンバーを主に、地域の連携にかかわるキーパーソンを加えた企画会議を設置し、医療と介護の連携促進へ向けた取り組みについて検討している。そこでの議論の中で、ケアマネジャーが最も困難感を感じているのが医療との連携だという指摘があり、市内病院の看護師とケアマネジャーを主な対象とした研修会を開催することとなった（写真）。

2008年に第1回が開催されたが、まずは自由に語り合える雰囲気づくりを目指し、グループワーク形式で互いを知ることから始めた。当初は、ケアマネジャーから「看護師が怖い」「病院が怖い」という声があったが、話し合いの中で、看護師も「ケアマネジャーが怖い」と思っていたことが分かり、互いを知らないことが怖さの原因だということに気づかされた。

第2回以降は、シンポジウム、事例をグループで考える、入院時の情報提供様式の作成、ロールプレイによる事例検討など毎回工夫しながら、互いの考えを同じ土俵で語り合える場となるよう心掛けて企画・運営を行っている。

現在は、顔の見える関係づくりから仕組みづくりへの転換を図るべく、取り組みを進めているところである。この研修会はこれまで8回開催されている。現在では200人近くの参加があり、当地区の医療・介護連携にとって、最大規模の研修会に成長している。なお、第2回以降、県立保健医療大学の後藤順子准教授に講師を依頼し、外部の専門家からの助言もいただきつつ、事業を進めているところである。

#### 入院前連携様式の作成と活用支援

ケアマネジャーが情報を発信する仕組みをつくりたいと、居宅介護事業所部会と協働し、地域で統一した様式の「入院前の状況報告書」を作成した。現在は、地域のすべての事業所が同一の様式を活用して情報を発信している。2011年10月請求分で86.2%の事業所に活用実績がある。

#### ITを活用した連携支援

鶴岡地区医師会で活用されている地域電子カルテ「Net4U」は、特に在宅医療において活用されているが、「在宅介護のキーパーソンであるケアマネジャーも積極的に参加すべきではないか」という意見があった。そこで、アンケートや説明会の実施など、ケアマネジャーへの普及を目指す活動を行った。詳細は、「ほたるの活動」の項で触れる。

#### 「在宅療養者のための連携シート」の作成

主治医とケアマネジャーの連携を図るために、2011年8月に鶴岡地区医師会の全面協力を得て、事前調査を実施した。調査内容につ

表 2 地域連携WG各協議会

基本対象	連携の会名	目的・課題
病院 診療所 医師	南庄内在宅医療を考える会 (年4回)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問診療を行う診療所を増やす</li> <li>・グループ診療体制を構築する</li> <li>・訪問診療・訪問看護の地域効率化の検討</li> </ul>
病院 調剤薬局 薬剤師	つるやくネットワーク (年3回)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問薬剤指導を行う薬局を増やす</li> <li>・薬剤師の「在宅」に関する意識改革</li> <li>・病院と調剤薬局との情報共有の検討</li> </ul>
病院看護師 ケアマネジャー	医療と介護の連携研修会 (年2回)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院とケアマネジャーの壁をなくす</li> <li>・病院と在宅間の情報共有</li> <li>・より良い自宅療養のための退院支援</li> </ul>
多職種	ふらっと会 (年1回)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらゆる職種が「ふらっと」な関係になる</li> <li>・日常的に相談できる関係づくり</li> </ul>
多職種	鶴岡地区医療福祉連携活動報告会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな協議会の活動を知ること、翌年度に生かす</li> </ul>
栄養士	南庄内栄養と食を考える会 (年2回)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食と栄養のさまざまな話題を解決に向け取り組む</li> <li>・歯科との共同で、口腔ケア関連も含む</li> </ul>
多職種	ITの活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療機関リソースデータベースの作成</li> <li>・Net4Uを医療、福祉、薬局での活用</li> <li>・医療と介護分野の様式統一とテンプレート作成</li> </ul>
医科 歯科	医科歯科連携講演会 (年1回) (鶴岡地区医師会・歯科医師会)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医科と歯科の連携推進</li> <li>・かかりつけ歯科紹介システム構築</li> <li>・在宅医療連携拠点事業室ほたるを中心に…</li> </ul>

いては、連携企画推進会議で検討した。調査協力医師は110人、医療機関は75カ所であった。2012年2月中に市内の居宅介護支援事業所を中心に連携シートを配布した。詳細は、「ほたるの活動」の項で触れる。

### ○緩和ケア普及のための地域プロジェクト(OPTIM)を中心とした活動

当地区は、2008年から3年間、国によるがん対策のための戦略研究「緩和ケア普及のための地域プロジェクト」(OPTIM)を受託し、地域における緩和ケアの普及を目指して、多岐にわたる活動を行った。OPTIMは、全国から4カ所が選定されたが、当地区は緩和ケアに関しては整備が進んでいない地域として選ばれ、国立がんセンター中央病院の支援を受け、介入研究が進められた。

OPTIMを契機に、それまで中核病院ではほとんど行われていなかった多職種による退院前カンファレンスが行われるようになり、その数は地域全体で123回に及んだ。退院前カ

ンファレンスにはケアマネジャーも参加するので、OPTIMは在宅医療における医療・介護の連携推進にも大いに寄与したと評価できる。

本プロジェクトを進めるに当たり、「教育」「市民啓発」「医療連携」「専門緩和ケア」という4つのワーキンググループ(以下、WG)が設置されたが、地域連携WGでは、職種ごとに多くの会が設立された(表2)。例えば、在宅を担う医師を中心とした「南庄内在宅医療を考える会」、在宅歯科診療の普及を目指した歯科医および歯科衛生士から成る「連携プロジェクトチーム」、調剤薬局と病院薬剤師から成る「つるやくネットワーク」、病院の医療者とケアマネジャー、サービス事業者との「医療と介護の連携研修会」、栄養士が主体の「南庄内栄養と食を考える会」などである。

これらの会は、それぞれが年間アクションプランを作成した上で計画的に活動している。また、すべての職種が集う懇親会である「ふ

らっと会」が年に一度開催され、職種の垣根を越えたフラットな関係を目指した活動も行われている。さらに、年度末には、それぞれの活動状況を報告する「鶴岡地区医療福祉連携活動報告会」が開催されている。

## ◎ 鶴岡地区医師会、

### 在宅医療連携拠点室「ほたる」の活動

鶴岡地区医師会では、2011年度の在宅医療連携拠点事業を受託した。本事業は、在宅にかかわる多職種の連携の充実を図るべく、そのコーディネート役としての拠点を置き、多職種協働による在宅医療の支援体制の構築や今後の政策立案や均てん化などに資することを目的とする。

事業受託後、医師会内に在宅医療連携拠点室「ほたる」を設置し、看護師、相談員、事務員の3人を配置すると共に、在宅医療連携拠点事業運営委員会を設立し、活動を開始した。前述したように、当地区ではすでに連携を目指した活動が数多く行われていたので、「ほたる」はそれらの活動を支援することや、集約する拠点としての役割を担うこととなった。

### 多職種向け研修会、意見交換会

当地区では、連携の会、医療と介護の連携研修会、さらにはOPTIMの連携WGでの活動など、数多くの研修会や講演会が開催されているが、ほたるでは、多職種、特に医療と介護の連携に焦点を当て、多職種研修会を年4回、企画・開催している。また、地域で数多くの会が開催されているので、テーマや日程が重複しないようスケジュール管理も担っている。スケジュール表は、ほたるのホームページで閲覧できる。

### 在宅療養者のための連携シートの作成

地域全体の医療と介護の円滑な連携を図るために、ほたるでは行政との定期的なミー

ティングを行っている。その取り組みの一つがケアマネジャーと医師との接点を広げるための連携シートの作成である。連携シートは、鶴岡市とほたるが協力して、小児科を除く市内の全医療機関に対して、相談しやすい曜日や時間帯、電話やFAX、メール、面談などの連絡・相談方法、サービス担当者会議の開催場所の指定など、ケアマネジャーとの連携の方法についての希望をアンケート調査し、作成したものである。

連携シートは市内の居宅介護支援事業所すべてに配布した。これまで医師の多くはケアマネジャーとコンタクトをとる機会が少なかったこともあり、ケアマネジャーの仕事の内容や役割、ニーズ、連携することの重要性について、十分に理解していない部分があった。この連携シートが両者をつなぐきっかけになればと期待している。

### ショートステイ空きベッド情報の公開

在宅医療を継続するには、レスパイトを目的としたショートステイは欠かせない。ほたるでは、ケアマネジャーがショートステイ先を探しやすいよう、市内すべての施設からショートステイ用空きベッド情報を取得し、ホームページで公開している（資料）。情報提供を始めるに当たって、ほたるのスタッフが市内の全施設を訪問し、趣旨を説明して歩いた。

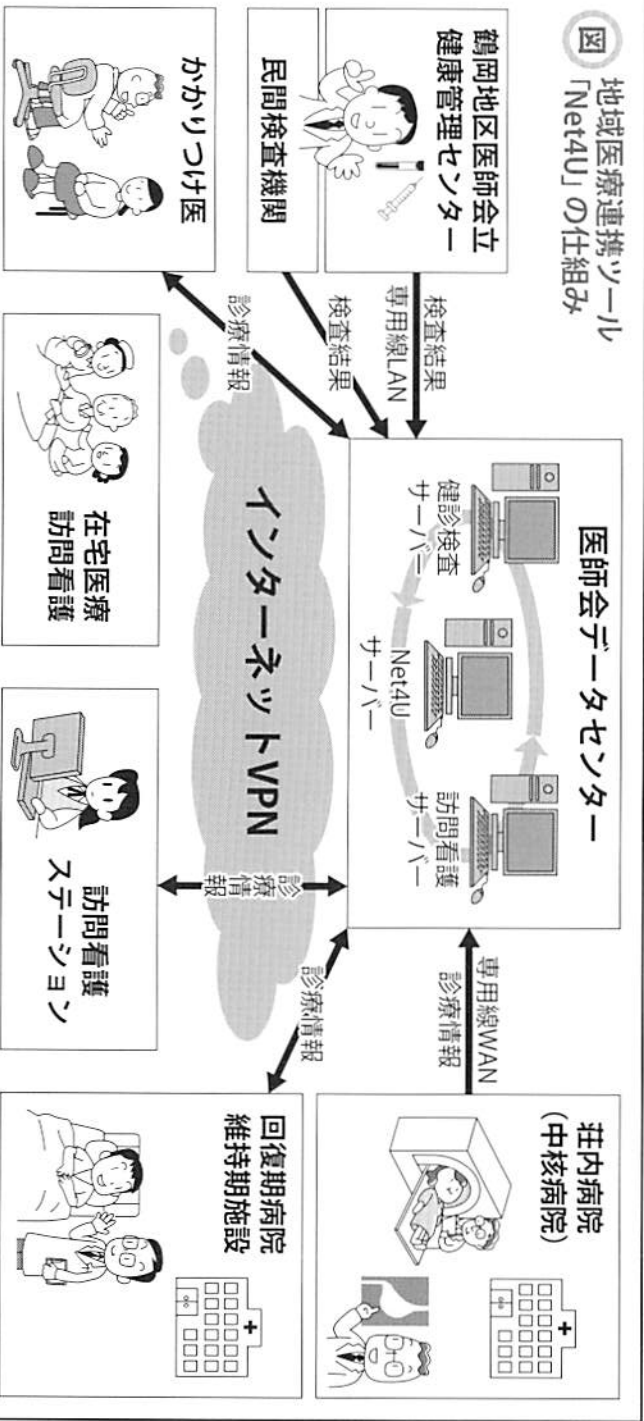
その結果、「空きベッドの情報を互いに共有することが、ケアマネジャーの業務改善につながる」という共通認識が生まれ、当地区の25施設すべてから定期的に鮮度の高い情報を提供してもらうことが可能となった。ケアマネジャーからは、「便利になった」という評価をいただいている。なお、関係者のみ閲覧可能としている。

短期入所空き情報

【表の読み方】・・・中に「1」(利用)がでても「0」(お休)上 ▲・・・その空きがゆるぎ(1〜2名) ×・・・短期入所用サーバーでの空き状況

サービス事業所名	電話番号	8/16	8/17	8/18	8/19	8/20	8/21	8/22	8/23	8/24	8/25	8/26	8/27	8/28	8/29	8/30
池空園(多床室)		▲	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
池空園(個室)		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
水寿荘		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
おみやま		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
しおん荘		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
温寿荘		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ふ心の花荘		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
かみじ荘(多床室)		●	●	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
かみじ荘(ユニット)		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
桃寿荘		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
かたひら荘		▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
ぶなの社		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
なの花荘(個室)		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
なの花荘(二人室)		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
のぞみの園		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ウチライト生健のぞみ		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ウチライト生健ちから		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
かわはら(療養介護)		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
ショートステイかわはら(生活介護)		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

図 地域医療連携ツールの「Net4U」の仕組み



セキュリティの保たれたネットワーク上で地域のさまざまな医療者が患者情報を共有できるツール

地域電子カルテNet4Uの介護系への普及

当地区では12年にわたり、地域電子カルテNet4Uを運用しており、特に在宅医療における、在宅主治医、訪問看護師、薬剤師、病院PCTなどとの間での情報共有、コミュニケーションの場として活用してきた(図)。

一方で、在宅での療養全般を管理するケア

マネジャーや、患者と最も接する機会が多い

ホームヘルパーなど、介護系の職種が参加していないという課題があった。そこで、ほたるの設置を期に、介護系への普及を目指す活動を開始した。介護系の職種は、組織に属していることがほとんどであり、本人自身が「Net4Uを使ってみたい」と思っても、トッ

ブの理解が得られないとなかなか導入には至らないのが現実である。そこで、Net4Uの説明会や意見交換会を数回実施した。それにより、居宅介護支援事業所8施設に導入されるに至った。まだ一部ではあるが、ケアマネジャーからの介護の視点に立った書き込みも見られるようになった。例えば、「往診した医師から、立ち上がりが困難になってきているとの情報をいただき、ケアマネジャーが訪問してベッドの使い方の説明をすることで、立ち上がりがスムーズになって自分でトイレに行けるようになった」という声が寄せられている。

また、「家族が経済的な負担を心配している」というような情報がNet4Uを介して在宅医に伝わり、訪問回数を調整したという事例もあった。Net4Uのような仕組みがあると、多職種間の垣根が下がり、互いに意見が言いやすいという現象が生まれる。Net4Uは、医療・介護連携推進の一助になり得ると考えている。

### 地域リソースの把握と総合相談窓口

在宅医療にかかわる多職種のコーディネーター機能を求められる「ほたる」では、さまざまな相談に応じて、「つなぐ」ことが求められる。そのため、地域のリソースを熟知する必要があり、地域リソースのデータベース化を進めている。その調査の一つとして、医療依存度の高い方の施設受け入れ調査を庄内医療連携の会と協働して行った。175施設からアンケートを回収し、内容をデータベース化した。その情報を拠点における相談業務に活用すると共に、120部の冊子化を行い、ケアマネジャーを中心に、医師会、山形県、保健所、鶴岡市などに配布した。

## まとめ

医療と介護の連携に限らず、連携を進めるということは、地域で顔の見える関係を築いていくことにほかならない。ここでいう、顔の見える関係とは、単に名前と顔が分かるだけではなく、考え方や価値観、人となりが分かり、信頼感を持って一緒に仕事ができることも含まれる。顔の見える関係が構築されると、「安心して連絡しやすくなる」「役割を果たせる」「キーパーソンが分かる」「相手に合わせて自分の対応を変えることができる」「同じことを繰り返すことがなくなり効率が良くなる」「責任を持った対応をする」など、連携が円滑になることが期待できる。

顔の見える関係を促進するには、地域の中で、互いの考えを語る場や一緒に仕事をする機会をつくっていくことが必要である。具体的には、GW、ロールプレイ、患者を一緒にみるなどが有効である。問題は、それを継続的に運用する仕組みをどのようにして地域で構築していくかであろう。当地区では、前述したように職種ごと、施設ごと、プロジェクトごとに多面的、多角的な活動が展開されており、まだまだ課題は山積しているものの、顔の見える関係が徐々にではあるができてきたと評価している。

連携による顔の見える関係だけで、医療・介護を取り巻くさまざまな課題をすべて解決できるわけではないが、少なくとも地域の医療・介護の質を上げる有効な手段であり、それぞれの地域で知恵を絞り、進めていかなければならないタスクと考える。当地区の取り組みが多少なりともヒントになれば幸いである。